

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12413

研究課題名（和文）観光地における創造的環境の成立要因に関する研究

研究課題名（英文）A study on components of creative milieu in tourist destinations

研究代表者

佐野 浩祥（Sano, Hiroyoshi）

東洋大学・国際観光学部・教授

研究者番号：50449310

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、持続可能な観光まちづくり推進のための観光地の価値のマネジメント手法の必要性を鑑み、創造都市論におけるキー概念である「創造的環境」に着目し、その概念整理と成立条件について明らかにするものである。国内外の創造都市論に関する先行研究を渉猟して「創造的環境」の概念を明確化しつつ、その概念に基づいて国内外の「創造的環境」が成立した事例について現地調査を実施し、帰納法的にその成立条件について検討、概念モデルを構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

創造都市論についてはこれまで様々な研究がなされてきたが、そのキー概念である「創造的環境」に着目した研究はわが国においては見られない。創造的観光に関する研究をベースとし、観光地の価値をマネジメントする計画論へ展開させた点で先進的である。また本研究は、複数の観光地の価値創造プロセスを実証的に検証して一般化を志向した点で、現在、その多くがケーススタディに終始している“観光まちづくり論”や“観光地計画論”を前進させるものと評価できる。さらに、本研究における「創造的環境」に関する議論は、わが国において計画論としての創造都市論に大きな波及効果を及ぼすことが期待できる。

研究成果の概要（英文）：In light of the need for a method of managing the value of tourist destinations to promote sustainable community development, this study focuses on the "creative milieu", a key concept in the theory of creative cities, and clarifies the concept and the components. After examining literature review on the theory of creative cities both in Japan and overseas to clarify the concept of "creative milieu", we conducted field surveys of cases in Japan and overseas where "creative milieu" had been established based on this concept, and inductively examined the components and constructed a conceptual model of "creative milieu".

研究分野：観光まちづくり

キーワード：創造的環境 観光地の価値 工芸 エコシステム

1. 研究開始当初の背景

持続可能な観光を実現するため、観光地として中長期を見据え、その魅力創出につながるような「観光まちづくり」を推進する必要性はますます高まっている。観光の持続可能性に関しては、観光客の増加や大規模な観光開発にともなう自然資源の価値の毀損などが問題となってきたが、近年は世界的な観光客の増加にともない、バルセロナやヴェネツィアなど人文資源を主とする観光地でも、“オーバーツーリズム”という用語をめぐって、観光の持続可能性を問うような研究が進んできている。ただ、そこでは、いかにして増大する観光客数や観光開発を適正規模の範囲でコントロールするか、といった問題解決に向けた手法についての議論が中心であり、そもそも何が問題なのか、毀損される観光地の価値とは何か、といった本質的な議論は希薄であった。観光地の価値に関しては、安島による一連の研究()があるが、観光まちづくりにおいて観光的価値をいかにしてマネジメントするのかという点については未解明のままである。

他方、地域の価値をいかにして創造しマネジメントするかについて、創造都市論に関する議論が参考になる。1990年代以降、脱工業化社会における都市のあり方として創造都市論が注目され、それらに関する研究が様々な国と地域で展開している。それらの創造都市論の議論の中で、価値が創造されるメカニズムについて着目すると、キーワードの一つとして「創造的環境」(creative milieu)という概念にたどり着く。この「創造的環境」という概念はきわめて抽象的であり、実証的な研究はほとんど進んでいない。しかしながら、この概念は、持続可能な観光まちづくりを志向するとき、観光的価値のマネジメントを目指す上で参考になるものと思われる。近年、創造都市論から発展した創造的観光(クリエイティブ・ツーリズム)という概念も近年注目されており、これに関する先行研究も主として国外で大きく展開しつつある。このような背景から、観光地の創造的環境のメカニズムを明らかにすることには大きな意義があるといえる。

2. 研究の目的

以上より、本研究のリサーチクエスションは、「観光地における創造的環境とは何か。その創造的環境はどのような条件のもとに成立するのか。」である。

創造的環境(creative milieu)とは、都市計画学の泰斗であるピーター・ホールの大著「Cities in civilization」で言及され、創造都市論の第一人者であるチャールズ・ランドリーの著書「The creative city」でも取り上げられている概念である。創造的環境を概括すれば、地域住民が主体的かつ創造的に問題解決に取り組む環境、と言えよう。本研究にひきつけば、持続可能性を意識しつつ、地域住民が主体的に観光地の価値をマネジメントするような環境、である。このような環境を事例ベースで涉猟し、その成立条件を帰納法的に明らかにする。本研究の目的を、より具体的に示せば、以下の通りとなる。

- ・創造都市論で言及されている「創造的環境(creative milieu)」の概念を明確化する。
- ・観光地における「創造的環境」の成立条件を、空間計画論的視点およびソーシャルキャピタルの視点から解明する。

創造都市論についてはこれまで様々な研究がなされてきたが、そのキー概念である「創造的環境」に着目した研究はわが国においては見られない。創造的観光に関する研究をベースとし、観光地の価値をマネジメントする計画論への展開が見込まれる点で先進的である。本研究は、観光地の価値創造プロセスを実証的に検証するため、現在、その多くがケーススタディに終始している“観光まちづくり論”や“観光地計画論”の一般化にも資するものになると考えられる。さらに、本研究における「創造的環境」に関する議論は、わが国において計画論としての創造都市論に大きな波及効果を及ぼすことが期待できる。

3. 研究の方法

上述した2つの研究目的(創造的環境の概念の明確化、創造的環境の成立条件の解明)に応じて、以下のような方法で研究を進める。

創造的環境(creative milieu)の概念整理

1990年代以降、創造都市に関する研究が様々な国と地域で展開している現状を踏まえ、第一段階ではそのような先行研究を網羅的に涉猟し、その中で触れられている「創造的環境」の定義や対象などについて比較分析を進めることで「創造的環境」の概念整理を行う。国際ジャーナルのオンラインデータベース(Science Direct等)を利用し、1990年代以降の創造都市および「創造的環境」に言及された論文を入手、その定義や事例などについてデータを抽出し、データベースを構築する。その上で、「創造的環境」の共通性や論者間の差異などについて比較分析を進める。また、上の分析を補足するため、わが国における創造都市論の第一人者である佐々木雅幸氏(大阪市立大学名誉教授)に対してヒアリング調査を実施し「創造的環境」の背景を深掘りしつつ、概念整理の精度を上げていく。この作業によって、抽象概念であった「創造的環境」が具体化され、計画論への落とし込みが可能になる。

観光地における創造的環境に関する事例調査

創造的環境の概念整理を参考として、創造的環境が成立・機能していると考えられる観光地の

事例を国内外から数か所選定し、関係者ヒアリングなどの現地調査および資料調査を通して、創造的環境の実態（推進母体とステークホルダーとのネットワーク、具体的な取り組み内容、地域経済への波及効果など）を把握する。加えて、創造的環境が成立するまでのプロセスについても把握する。その上で、各事例の共通点を整理して、創造的環境の成立条件を一般化モデルとして帰納法的に明らかにする。

4. 研究成果

本研究の目的は 創造的環境の概念の明確化、 創造的環境の成立条件の解明の 2 点であったが、研究代表者と研究分担者とで高頻度で打合せを重ね、議論を尽くしてきた結果、上の 2 つの研究目的に対する成果としては概ね共通理解の得られる結論が導出できた。

創造的環境 (creative milieu) の概念整理

本研究におけるキー概念である「創造的環境」に関して言及している先行研究を渉猟し、概念整理を行った。管見の限りだが、創造的環境について最初に言及しているのは、都市計画の泰斗であるピーター・ホールであると推測されるが、彼の著書「Cities in civilization」(1998 年)において、創造都市の都市空間に存在する創造的環境を指摘し、創造的環境の 2 つの側面を明らかにしている。一つは「心理的および社会的特性の長期にわたる蓄積、世代を超えた一種の文化的複製 (特に芸術や思想)」、もう一つは「セレンディピティの要素：人々が出会い、話し、音楽や言葉を聞き、ダンスを踊り、考えを取り入れる」である。この 2 つの側面が、創造環境の重要な概念だと考えられる。他方、マイク・ダグラス (2013) は「創造的な環境」の概念を「公式または非公式に、有形または無形の、地方の経済活動に従事している地域社会の地方の空間または空間的で陽気な兆候」と説明している。また、創造的環境はアジアで一般的でユニークな現象であるものの、現在、繁栄する新自由主義の脅威にさらされていると指摘している。

観光地における創造的環境に関する事例調査

創造環境の概念整理を踏まえて、国内外の事例について現地調査を実施した。新型コロナウイルスの影響もあり、当初の予定通りとはならなかったものの、オンラインツールを活用しながら、より多くの事例調査を実施することを心掛けた。

製法や値付けなどを一切変えない伝統工芸品である小鹿田焼の産地である大分県日田市小鹿田集落、産地が疲弊する危機感から近年では外部からのアイデアを積極的に取り入れながら断続的にイノベーションを起こしている波佐見焼の産地である長崎県波佐見町、大雪山国立公園を有し、観光客のみならず移住者を集めて注目されている北海道東川町、地域の伝統工芸に着目したまちづくりイベント RENEW が実施されている福井県鯖江市、また改修された古民家を核に農的コミュニティがレストランや宿泊施設を運営している石川県小松市滝ヶ原地区、さらには海外の事例として在住アーティストが様々な活動を展開して地域の価値を高めているカナダ・ソルトスプリング島を対象に、現地調査を実施した。現地調査にあたっては、事前調査によって創造的環境とその関係者を同定し、複数のキーパーソンへのインタビュー調査を基本とした。

こうした創造的環境に関する事例調査の成果を持ち帰り、研究代表者と研究分担者とで議論を重ね、帰納法的に創造的環境の成立要件を整理した。すなわち、「景観/資源」、「立地」、「中核」、「組織」、「気質」、「情報/知」、「経済」、「展開」、「課題」といった指標に集約させ、それらの関係性を図化した。共通点としては、地域行政は後景化し、あくまで民間プレイヤーの黒子に徹している点や、プレイヤー同士はゆるやかにつながるものの、近すぎず遠すぎず、自律性を損なわない程度のバランスを保っている点などである。この図については、わが国の創造都市論の泰斗である佐々木雅幸氏に一定の評価をいただくことができた。

以上、本研究では上記 の調査を通して、わが国ではほとんど議論されてこなかった「観光地の価値」およびその価値を生み出すエコシステムとしての「創造的環境」について一定程度の研究成果を生み出したと考える。本研究の成果の一部を査読付き論文に投稿することを予定しており、本研究を萌芽の研究として、同分野における研究の発展に期待している。

安島博幸「観光価値の増減要因に関する理論的考察」(『日本観光研究学会全国大会学術論文集』26, pp.269-272, 2011.12)

安島博幸「観光的価値の生成過程に関する理論的考察」(『日本観光研究学会全国大会学術論文集』29, pp.285-288, 2014.12)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐野浩祥	4. 巻 71(3)
2. 論文標題 観光によって人々が交流する国土：観光概念の拡張へ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 都市計画	6. 最初と最後の頁 56-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秦子琇, 佐野浩祥	4. 巻 37
2. 論文標題 中国におけるボトムアップ型観光振興：河南省修武県における「美学経済活性化政策」を事例に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本観光研究学会全国大会学術論文集	6. 最初と最後の頁 303-308
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳未来, 佐野浩祥	4. 巻 37
2. 論文標題 盛岡らしさに関する研究：盛岡市中心市街地イメージマップによる空間構成要素の分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本観光研究学会全国大会学術論文集	6. 最初と最後の頁 383-387
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐野浩祥	4. 巻 106(8)
2. 論文標題 わが国の戦後国土計画の回顧と展望：国土計画不要論を超えて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 土木学会誌	6. 最初と最後の頁 18,21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐野浩祥	4. 巻 73(4)
2. 論文標題 観光の視点からの復興論 平成 19 年能登半島地震からの学びと観光の創造的復興に向けて	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 都市計画	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	水野 雅男 (Mizuno Masao) (20547088)	法政大学・現代福祉学部・教授 (32675)	
研究分担者	丸谷 耕太 (Maruya Kota) (50749356)	金沢大学・人間科学系・准教授 (13301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------